

家族看護者の心的状態のフィードバック

Feedback related to Mental States of Family Caregivers

樋口夕希子*¹ 泓田正雄*¹ 成本迅*² 小川真由*² 森田和宏*¹ 青江順一*¹
 Yukiko Higuchi Masao Fuketa Jin Narumoto Mayu Ogawa Kazuhiro Morita Jun-ichi Aoe

*¹ 徳島大学大学院先端技術科学教育部
 Graduate School, Tokushima University

*² 京都府立医科大学大学院医学研究科
 Graduate School, Kyoto Prefectural University of Medicine

Recently, as society has been aging rapidly, and it becomes a big problem to confirm the wills of patients with disorder of memory. At the same time, family caregivers of the patients have many burdens. But they don't mind themselves because of the caring. In this study, we propose the system which automatically judges the contents of the interview with family caregivers, and grasp their psychological burdens from an objective perspective.

1. はじめに

現在の日本では高齢化社会の進行に伴い、様々な要因で介護を受ける立場の人々が増加している。一口に介護を受けているといってもその範囲は広く、ほとんど自立している患者もいれば、記憶・判断力の障害が起こり、社会生活や対人関係に支障の出ている患者もいる。特に後者のような場合、患者本人の意思を確認することが困難である場合が多い。このようなケースにおいて、患者のその後の処置をどう決定するかは非常に難しい問題であり、医療現場のみならず、社会における大きな課題となっている[厚生労働省 13]。

また、前述のような患者を持つ家族看護者も同様に、心身共に多大な負担を抱えることとなる。懸命に介護をおこなうあまり体調を崩してしまったり、酷い場合には自らがうつ病などに陥ってしまったりする例は、実際に少なからず存在している[厚生労働省 15]。このような事態に発展してしまえば元も子もない。患者だけでなく家族看護者の状態も合わせて考慮し、医療側と患者側とが円滑な関係を築くことは、これからの社会にとって必須であるといえる。

こうした医療側と患者側との関係について、白岩らの研究[白岩 13]が存在する。患者側の心理的過程を検討することで、担当医に対する信頼や医療機関による説明がどの程度影響を与えているかを調査している。また、山下らは、うつ病患者の家族介護者が抱える負担を解明することを目的とした研究[山下 14]をおこなっている。家族看護者に対してインタビューを実施し、ストレスの構成原因を調査している。

これらを踏まえ医療側から患者やその家族看護者へ意見するにあたって、患者側にとって望ましくない内容を伝える必要がある場面は少なからず存在する。しかし、対面で医療側から否定的な意見を受け取った場合、患者はその内容や医療側に対して反感を抱いてしまうことも考えられる[深田 98]。

そこで本研究では、家族看護者を対象としたインタビューにおいて、会話内容を自動で判断するシステムの構築をおこない、客観的な目線での家族看護者の心的負担の把握及び軽減を目指す。

2. 関連研究

白岩らの研究[白岩 13]では、架空の無過失医療事案を題材としたシナリオ実験をおこない、患者のたどる心理的過程を検討している。シナリオは「仮死状態で生まれた乳児に重度の障害が残った」という事例を用い、担当医や医療機関の処置に明白な問題はないと示すものである。そのうえで「担当医への信頼」「医療機関の説明のあり方」「公的支援の内容」の要因を操作し、障害児の保護者などを対象に、担当医・医療機関に対する訴訟意図を尋ね分析をおこなっている。この分析により、担当医に対する患者の信頼や、医療機関による丁寧な説明は、患者の訴訟意図を緩和させる効果を持つことがわかった。

山下らの研究[山下 14]では、うつ病患者の家族看護者を対象にしたインタビューを実施し、彼らの抱える困難を抽出している。インタビューの結果、家族看護者の精神的・社会的ストレスに関して「期待と現実の乖離」「第三者と心のうちを共有したい気持ちと、身内の病気を秘匿したい気持ちのジレンマ」「患者のことを理解し再発防止に努めたい気持ちと、つらい看護を忘れ現実逃避したい気持ちのジレンマ」の3つのテーマが見いだされた。患者が極度に物事を忘れやすくなってしまったり、些細なことでもネガティブに捉え攻撃的になること、気分の波が激しいことなどが主な困難として挙げられる。この結果から、口頭で話した内容をテキストメッセージ化するツールや、家族看護者同士で交流できるSNSが効果的であるという結論が出された。

しかしこれらの研究では、医療側による主観的な分析を中心に扱っており、患者にとって分かりやすいフィードバックが存在しないことが問題点として挙げられる。

3. 提案手法

本研究では関連研究の結果を踏まえ、家族看護者を対象としたインタビューから、会話内容を自動で判断するシステムを構築する。家族看護者の発言から特徴語を抽出することで、内容を把握し様々な話題カテゴリに分類する。

3.1 発言の特徴分析

本研究で用いるインタビューは、医療関係者が患者や家族看護者の現在の状況について質問をおこない、家族看護者が回答しているものである。この内容を分析した先行研究[小川 14]において39種類のカテゴリが作成されており、本研究の話題カテゴリはこれに準ずる。表1にその一部を示す。

3.2 発言分類パターンの作成

本手法ではパターンマッチングを用いてカテゴリの分類をおこなう。例えば、発言中に「医師」「指示」「従う」などの表現が含まれていた場合、「医師に対する遠慮と引け目」というカテゴリに分類する。こうしたカテゴリ分類のための照合規則を 186 通り作成した。表 2 にその一部を示す。

3.3 話題カテゴリの出力

パターンマッチングにより分類された話題カテゴリの表題及びインタビューにおける割合の出力をおこなう。例を図 1 に示す。なおインタビューの発言中には、相槌や「わかりません」といった、質問の回答に該当しない発言が存在しているが、そうした発言は除外するものとした。話題カテゴリの判断材料に欠けると同時に、応答文を生成する必要性が低いと考えられるためである。

4. 評価実験

提案手法の有効性を確認するため、話題カテゴリの分類システムにおける評価実験をおこなった。以降詳細について述べる。

4.1 実験設定

インタビューの対象者は、精神科・心療内科に通院している認知症高齢者の家族看護者 14 名である。医療関係者による質問のあと、家族看護者が回答を述べる対談形式となっている。このインタビュー内容から家族看護者の発言のみを抜き出し、話題カテゴリへの分類をおこなった。分類結果は適合率及び再現率を用いて評価し、正誤判定は人手による。照合規則作成の際に用いた発言 237 文をクローズドデータ、その他の発言 395 文をオープンデータとする。

4.2 実験結果と考察

カテゴリの分類結果を表 3、表 4 に示す。各分類結果において、適合率に関しては良好な結果が得られたが、再現率に関し

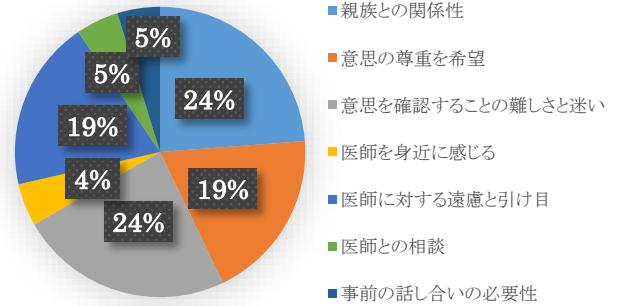


図 1. 分類結果の一例

表 3: クローズド実験結果

適合率	再現率
95.6%	73.8%

表 4: オープン実験結果

適合率	再現率
80.5%	16.7%

ては低い割合にとどまった。使用できたコーパスが少なく、発言分類の照合規則を細かい単語による指定で作成したため、誤り分類が少ないと同時に取りこぼしが多くなったと考えられる。適合率を維持したまま再現率を上昇させられる照合規則の考案、及びコーパスの増加が必要である。

また、各家族看護者の発言の特徴による結果の差も見受けられた。方言などを含む長く具体的な発言は分類が困難であり、標準語で簡潔に示された発言は分類が比較的容易であることがわかった。前者のような発言を分類するにあたって、前もって方言を標準語に直すことが有効ではないかと考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、認知症高齢者の家族看護者を対象としたインタビューにおける発言の趣旨を特定するため、発言の特徴をもとに話題カテゴリへの分類をおこなった。今後は更なる照合規則の改良とともに、方言や具体的な病状を含む長文に対する分類方法を考案し、再現率の向上を図る。また、分類したカテゴリを用いて応答文を作成し、家族看護者への直接的なフィードバックを検討する。

参考文献

- [厚生労働省 13] 認知症への取り組み,
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/dementia/>
- [厚生労働省 15] 事例紹介 | こころの耳,
<http://kokoro.mhlw.go.jp/case/worker/000658.html>
- [白岩 13] 白岩祐子, 唐沢かおり: 医療機関による説明のあり方が患者の医療評価に及ぼす効果, 日本社会心理学会大会 第 54 回, 2013
- [山下 14] 山下直美, 葛岡英明, 平田圭二, 工藤喬: うつ病患者の家族看護者が抱える社会的負担を構成する要素の解明, 情報処理学会論文誌 Vol.55, No.7, pp.1706-1715, 2014
- [深田 98] 深田博己: インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学, 北大路書房, 1998
- [小川 14] 小川真由, 成木迅, 福居顯二: 認知症高齢者への医療行為の代諾に関する介護家族へのインタビュー調査の質的検討, 日本精神神経学会学術総会第 110 回, 2014

表 1: 話題カテゴリの一例

話題カテゴリ	
親族との関係性	事前の話し合いの必要性
医師との相談	本人の苦痛軽減
意思を確認することの難しさと迷い	医師に対する遠慮と引け目
医師を身近に感じる	連携された体制
意思の尊重を希望	周囲の価値観

表 2: 分類照合規則の一例

話題カテゴリ	分類照合規則
医師に対する遠慮と引け目	<病院><助詞で><->
	<指示><助詞を><-><もらう>
	<医師><助詞の><指示><-><従う>
	<私><-><分からない>
<医師>: 医師, 医者, 先生, 主治医 <私>: 私, わたし, 僕, こちら <->: ワイルドカード	